

「巻き込まれ親父の番外編」その内親父と呼ばれる男」

作 藤次郎政秀

●プロローグ

この世界では、もう長い間世界各地で戦争が続いていた。世界大戦と言うレベルではなかったが、世界各国間で小競り合いが起こっていた。

そのため、H Gが居る皇国では、150年程昔から、時の皇王の富国強兵政策に基づく徴兵制度の法律があり、男性は年齢18歳から30歳、女性は18歳から25歳の間に4～6年の兵役に就く事になっている。

無論、障害者や家庭の事情（介護、母子家庭の母親等）により、兵役に就けない者は、兵役を免除され、後方支援などに当てられるが、有り体に言えば『五体満足であり、且つ読み書きできる者は、全員兵役に就いて国の為に働け！』と言う事である。

兵役に就くのを遅らせることが出来るのは、大学・専門学校への進学をする事であるが、卒業と同時に兵役に就く事は変わらない…

H Gは、18歳で徴兵検査と思想検査（国家に対する忠誠心とか危険思想が無い事）を受け、問題なく兵役に就く事が決まった。この徴兵検査の時、一般的な男性の平均値以上の体力成績を残した。それは、H Gが子供の頃から、母方の祖父から家に伝わる古武術の手解きを受けたおかげである。

H Gは大学進学を理由に徴兵による入隊時期を遅らせ、F県領地にある私立大学の電気・電子工学部に進学して、そのまま修士課程を卒業して兵役についた。

H Gの祖父が兵役に就いていた時は、B県領地のY海軍基地で機関士の学校を出て、駆逐艦の機関士として6年（海軍機関学校に2年居たため）の徴兵任期を終えて、故郷のG県領地に帰るために列車に乗り込んだが、大雪のため、列車が運行されなくなり、隣駅のY国際

港駅で列車を降ろされ、雪の中、見舞っていた所を後の祖母に拾われ、白山亭のボイラーマンになったそうだ。また父親の兵役時代にはY海軍基地の工場で機械工として技術を習得し、徴兵任期を終えて、工場で一緒に働いて居た後のH Gの母の兄である叔父(K Mの父親)と共に金属加工の会社を興した。H Gも徴兵任期中に何か手に技術をつけて、徴兵任期終了後、叔父の会社に入社する気でいたが、H Gは父や祖父と違い、陸軍に入隊する事になった。

その頃の世界情勢の主なものは、大陸にある皇国の隣国のC国内で、H Gが生まれる以前から、皇帝親政による政府での長年の腐敗で、C国内各地で反乱が起り、反乱を平定するため、C国政府の要請により、周辺各国が派兵を行った。その中に、皇国の軍隊(当時の呼称は、皇国政府軍)も参加し、一応の終結が見えて来た頃であるが、C国内ならびに周辺国との小競り合いは依然として続いていた。

C国全体が戦場になった『先の大戦』と呼ばれる戦争が一息ついたところである。

●帝都機甲師団特殊車両試験部隊

H Gが帝都内での皇国政府陸軍訓練施設で一年間の基礎訓練を終えて配属された先は、帝都機甲師団特殊車両試験部隊：赴任地は帝都の外れの奥地にある兵器試験場。

帝都の西の外れにある都市部から1日数往復のバスに揺られる事、1時間の山間部にあった。

特殊車両試験部隊の任務は、新しく開発されるか、または改良された素材を使用した機能・機構・武装を組み込んだ軍用車両のテスト部隊である。

テストは、民間の兵器開発企業と共同で行い、有能な者や試験車両が固定化すると、民間の兵器開発企業へ出向して、任務を行う部隊であった。

H Gは大学で電気・電子工学を専攻したので、車載機器の電装系全般と火器管制装置等の

電気・電子機器全般をテストする事になった。

基礎訓練時に知り合った同時期に徴兵された者達は、既にC国の前線や皇国防衛のために国境付近の島嶼で隣国との小競り合いの戦線に送られているそうだが、HGは後方で機械いじりをして技術を学んだ。

そうして1年が過ぎると、HGの階級は二等兵から自動的に一等兵に昇進した。

その時に新兵として、HGが居る兵舎にSKと言う男が入って来た。

HGは上官から、今後の任務は新たに配属された車両のエンジン・足回り担当のSKと組んで、試験を行う事を命じられた。

HGはSKと話をしていて、SKが大学で1年留年して兵役に就いたので、HGと同年だと知り、HGはSKに「任務中はタメ口でいいよ」と言った。HGとSKの相性は良く、趣味も似通っていた。

特殊車両試験部隊で日夜機械いじりや試験をしていますが、軍隊なので当然軍事訓練や演習が行われる。

その日、HGは射撃訓練で、自分の所属する分隊の自動小銃を武器庫から借りてくる当番をSKとしていた時、その内の一丁におかしな箇所を見つけた。

「おい、SK。この自動小銃の排莖口…なんか変じゃないか？」

「どれ…確かに変な傷があるな…オペレーティングロッド引いて見ろよ」

「うん…あれ？なんか引っかかる…」

「ボルトが解放されてないな…下手すると暴発するじゃねえか？」

「そうだな…武器庫の担当士官に話して交換して来るよ」

H Gが武器庫に居る担当士官に銃の不具合を話すと、担当士官は銃を操作して、故障しているのを認めた。そして「よく気付いた」と言われ、代わりの銃に交換して貰った。

その事を射撃訓練場でS Kに話すと

「やはりか…よく気付いたな」

「いや、排莢口に傷があつて…変に感じたんだ。それから、担当士官はお前と同じことを言っていたが、なんでそこまで解ったんだ？」

「それは、俺は子供の頃から狩猟をしている親父から銃器の扱いを教えて貰い、それがきっかけで“特別銃器携帯・使用許可証”取得の為の勉強をしたんでな」

「“特別銃器携帯・使用許可証”？なんだそれ？」

「銃器の取扱いについての免許証だよ。銃器一般の法律や操作について問われる。これに受かると軍では手当てが付くし、除隊しても銃器が扱える」

「そうなんだ」

「俺は既に特別銃器携帯・使用許可証を取得している。俺が一年留年したのもこいつを取るためもあった。除隊したらガンスミスをやるつもりだ」

「ガンスミス？」

「銃の改造や、メンテナンス等を請け負う仕事だ。これを民間でやる場合に客から預かった銃器を持ち歩いたり、撃ったりするのに必要なんだ。お前も取得したらどうだ？」

「おもしろそうだな」

H Gは、S Kに教わりながら、特別銃器携帯・使用許可証取得の勉強を始めた。

部隊で特別銃器携帯・使用許可証取得に対する奨励金と講座がある事を知り、履修した結果、次の試験で拳銃・短機関銃・小銃・突撃銃・散弾銃・軽機銃・擲弾筒（ランチャー）の試験に合格し、その次の試験で重機関銃（口径20mm未満）に合格し“限定解除”になっ

た。また、翌年には、更に、上位免許の機関砲（口径20mm以上、40mm未満）や大砲（40mm以上200mm以下）の使用ならびに取扱い許可証まで取得した。

それから、HGの勉強熱にスイッチが入り、任務の余暇を使って。戦闘・戦術技法ならびに作戦立案講座、部隊長講座、輜重・主計学講座、士官学校予備講座、工兵講座、大型自動車免許と大型特殊自動車免許、自動車整備士等々：次々と履修して修了ならびに免許取得をして行った。

SKはHGの勉強熱に呆れつつも、今度はHGに教わりながら、それまでの「特別銃器携帯・使用許可証」の拳銃・小銃・散弾銃をHG同様「限定解除」にして、更に、上位免許の機関砲（口径20mm以上、40mm未満）の使用ならびに取扱い許可証まで取得した。また、戦闘・戦術技法ならびに輜重・主計学講座、工兵講座、大型自動車免許と大型特殊自動車免許、自動車整備士等々：次々と履修して修了ならびに免許取得をして行った。

● I I

HGが伍長、SKが上等兵に順調に進級した時に、HGの部下に新たにII二等兵が配属された。IIは通信工学部の修了者で、背の小ささと顔立ち、おまけに名前が女性みたいなので、子供の頃から周囲からから「Iちゃん」と女の子扱いされる事が多かった。そのため、精神的に少し歪んでいた。

始めて、IIがHGに挨拶した時、HGはそう言う概念を持たずに、「「II」：大昔の剣豪に同じ名前の人が居たねえ：いい名前じゃないか」と、親がつけた名の意味をIIが教える前に即答で褒めた。

IIはそれを聞いて「その剣豪は自分の祖先で、私が生まれた頃、身体が弱かった自分に對して両親が強かった先祖の名を付けました」と嬉しそうに話した。

それ以降、たまにHGやSKから「Iちゃん」呼ばわりされる事があるが、それは女の子

扱いと言うよりも、部下に対する愛情で、失敗した時や何かやらかしている時だと分かっているのです、笑う事ができた。

この頃の世界情勢は、C国の北側に隣接するN国がC国国土に進出する野望を抱き、陰で反政府勢力に肩入れしたため、反乱は再度混乱状態になる。それでも、一旦混乱が収束すると、皇国政府は「大陸に野望無し」と宣言し、軍を真つ先に引き上げた。それに続いて各国の派遣軍も引き上げ続ける中で、N国だけは最後まで居座り、再度反乱軍を焚き付けC国政府を倒してしまった。C国の皇帝の再度の要請に皇国政府は直ちに派兵を行う議決をしたが、居座ったN国の国土は強大な上、海を隔てた皇国とは違い、陸続きなので、長く接する国境を超えて次々とC国に兵力を増強し、駐屯してしまった。この兵隊と反乱軍の両方を相手することは国力の差から無理と判断した皇王は、C国から逃れてくる人々を受け入れ、皇国自体を防衛する事で精いっぱいになった。

また、この頃の世界兵器事情は、未だ機械制御が主流ではあるものの、機械制御の一部を半導体を使用した電気回路に置き換えた制御装置や、中央演算処理装置（CPU）と簡単なプログラム制御の電子制御装置を使用した兵器や機器に置き換わり始めていた。

IIはその様な電子制御の兵器や機器に対する、無線での遠隔操作や通信機器の試験要員としてHG達の下に配属された。

●HG初陣

『ポーン！間もなく、仮装輸送艦〇〇は、Z県領地O島に接岸する。車両搭乗員は各車両搭乗の上待機、繰り返す…』

「おい、SK、II行くぞ！」

HGは、部隊指揮官の居る船室から戻ると、客室デッキで待機しているSKとIIに声を

かけた。

「応」「はこ」

H G達が試験している“駆逐装輪車”と名付けられた、兵員輸送用の8輪装輪装甲車を改造し、そこに105ミリ低反動対戦車砲を搭載しただけと言う、走行重視、装甲軽視の試作車両3両が帝都機甲師団特殊車両試験部隊から、試験を行っている乗員込みで最前線のZ県領地O島に派遣された。

Z県領地は皇国の南の島々で構成されている。隣国のC国と近く、度々C国からの領土侵害があり、戦前はその海域で捕れる特産の回遊魚と島で生産される南国ならではの農産物で有名であったが、度々の戦闘で島々は荒廃していた。

O島はZ県領地の3番目に大きい島で、この島を完全に占領されると、他の島に対する補給が難しくなると言った要衝の島である。

島の大半は中央にある火山と火山を取り囲むように古代から形成されたサンゴ礁から成っていて、サンゴ礁に火山灰が積もった土地が多いこの島は、道路以外は移動手段に牛馬が荒れ地走行用の車両を使わなければ、難しい土地である。

皇国政府軍は、その地に主力戦車隊を投入して侵攻して来るC国兵士を撃退しているが、不整地走破能力がある戦車のキャタピラーをもつてしても、この地ではその重量で地面に車両が沈み込むため速度が思ったように出せず、もたもたしている内に側面に回り込まれて対戦車ロケット等で破壊される事態が続いていた。その内にC国は島に橋頭堡を築き、軽戦車を投入して侵略地を拡大し始めた。

そのため、軍は急遽現地の8輪装輪装甲車に歩兵用の対戦車ロケットや対戦車ミサイルを搭載したりして、敵軽戦車に対処しているが、装甲が薄くまた搭載するロケットやミサイルが少ないため、軍本部に対して軽戦車の投入を打診していた。そこにH G達が試験している“駆逐装輪車”に白羽の矢が立ったのである。

これがH G達の初陣になった。

「『仮装輸送艦』って言ったって、民間のフェリーを徴用しただけじゃねえか」

と車両デッキにある駆逐装輪車の運転席に乗り込んだS Kが毒づいた。

「S K：お前の気持ちは分かるが、それをそこに居る海軍士官の耳に入ったら、海に叩き込まれるぞ」

運転席の外でH Gが言った。

「分かってるって。徴用艦でも海軍が運用していれば軍艦扱いだろ」

「そうだ」

H Gの階級はこの時軍曹。S Kは伍長。I Iは上等兵になっていた。

H Gがまだ車両に乗り込まず、外に居るのは、試験部隊の隊長からの指示を待っているかである。

「H G軍曹」

「はい」

H Gは、先頭の車両からこちらに來た隊長に陸軍式の敬礼をし、隊長も答礼を返す。H Gが直ると

「貴様の3号車は、2号車の後に続き下艦の後、フェリー埠頭に移動。その先の移動については、現地の部隊指揮官の指示に従う。遅れるなよ」

「了解しました」

H Gは駆逐装輪車側面のステップを登り、砲塔のハッチに潜り、インカムを付ける。

『ポーン、これよりランプウェイを開ける。各車両はエンジンを始動。誘導に従って急ぎ下艦せよ。繰り返す…』

艦内放送に従い、H Gはインカムで

「S K、エンジンスタート」

『応』

途端に周囲が排気ガス臭くなる。普通のフェリーでは、誘導員の指示があるまでエンジンを掛けないが、ここは既に戦地である。いつ敵の襲撃があるかも分からないので、仮装輸送艦に搭載された車両は短時間で下艦する必要がある。

先に補給物資を載せた車両を降ろし、車両デッキの誘導員がH G達駆逐装輪車部隊の誘導を始める。

「S K、2号車に続け。前進」

『応』

H G達は、O島のフェリー埠頭に降りた。

フェリー埠頭で隊長が現地の指揮官と話をして、次の移動先が告げられる。

「我が隊は、それから国道を走行して10キロ先の補給基地に向かう」

「了解しました」

H G達は、フェリー埠頭を出発し、隊長の乗車する1号車、それに続く2号車の後ろに付いた。

…その途中、

『こちら、S K。エンジンにトラブル発生！！』

「ナニ？別に走っていても問題ないようなエンジン音だが…」

『エンジン系統、走行ギア系のアラームランプが点灯している。止めて見てみないと分からない』

「走行ギアもだど？フェリー埠頭を出た時、異常はなさそうだったが」

『クソ！南の島に着いた途端、へそ曲げやがった！原因は分からん！』

H Gは先頭を走る隊長に、

「こちら3号車、エンジントラブル発生！停車して調べる」

『こちら1号車。どうした？』

「エンジン系統、走行ギア系のアラームランプが点灯したそうです。S K伍長が停車してエンジンを見てみないと分からないと言っています」

『わかった。先に行く、直り次第補給基地に来るように』

「はい、3号車停車して修理を行います」

H G達の乗った駆逐装輪車3号車は、国道の路肩に停車した。

H Gは砲塔ハッチから飛び降りて、駆逐装輪車のエンジンルームに向かう。

「I I」

『はい』

「1号車から連絡が入ったら教えてくれ」

『はい』

H GはS Kとエンジンルームのハッチを開けて中を覗き込んだ。

「うーん、どうやらエンジンルームの電装系に過電流が流れて車両監視制御機器の回路が焼けているな…」

とH Gがエンジンルームの車両監視制御機器のボックスを開けてみると、

「なんだよー、エンジンルームのセンサー系の電気系統がおかしくなってアラームランプが点いただけだよ。電装系担当のH Gさんよ！」

「えー、ここの部品この車両を受領してからいじってないぞ」

「いじってなくても、点検ぐらいしろよ！」

「悪かった」

「応急処置はどうする？」

「このままだと、ここから火が出て、動く事すらできなくなるから…必要なケーブルだけ直結しよう」

と言って、H Gは応急措置作業を始めた。

「これじゃ、今度本当にエンジン系統や車体に問題があっても、アラムランプが点かなくなるな」

「そーなるね。補給基地にこの車両のベースとなる8輪装輪装甲車があるから、予備部品が手に入るだろう」

「そんな事言って、過電流ならまた回路が焼けちまうじゃないか」

「向こうの整備兵と話して、この周辺部品毎交換するしかないな」

「そー来る？」

H Gは応急措置をして、手袋をはめた手でパンパンと叩くと、

「ま、取り敢えずこれで補給基地に向かおう」

「分かった」

H G達駆逐装輪車3号車は、補給基地へ先に行った1号車と2号車を追いかけるために出発した。

『“回送中”と書いた紙でも貼りますかね』

とI Iが冗談交じりに言うと、S Kが

『“故障中”の方がいいぞ』

「そうだな…」

と答えたH Gは、いつこの車両が故障するか気が気ではなかった。

H G達が再び走り始めて暫く行くと、国道の道端に居る1分隊に呼び止められた。

『おい、H G。あいつらこの車両を8輪装輪装甲車と勘違いしてるんじゃないか?』

「だろうな…」

『どうします?』

I Iも心配そうに言う。

「1分隊は載せられないことを、後部ハッチを開けて見せるさ」

『やっぱり、“回送中”と貼っとけばよかったですね』

『ハハッ、ちげえねえ』

等とやり取りして、H Gは砲塔ハッチから身を乗り出して

「どうかしたか?」

と下に居る分隊長の伍長に呼びかけた。伍長は砲塔ハッチから身を乗り出しているH Gの階級章を見て、敬礼し、

「軍曹殿、自分達はフェリー埠頭からこの先の補給基地に輸送用トラックで向かう途中で、分隊の一人が急に体調がおかしくなり、ここで降ろして貰い様子を見ていたのですが、一向に復調の気配が無く、却って緊急を要する様で、急ぎ補給基地に運ぶために載せていただきました」

それを聞いて、H Gは砲塔から路面に飛び降り、

「帝都機甲師団特殊車両試験部隊のH G軍曹だ。この車両は皇国政府軍の8輪装輪装甲車をベースに対戦車砲を載せた試験車両だ。とても分隊の人数は載せられない程に改造されている」

「それでも構いません、体調不良の彼女だけでも載せていただけませんか?」

「君は?」

「帝都近衛師団第3大隊第1中隊第3小隊第2分隊のJ T伍長であります」

H GはJ T伍長を後部ハッチまで案内して、後部ハッチを開けると、中を見せた。

「この通り、本来兵員を載せる場所に対戦車砲を載せた砲塔があるので、その駆動系とか砲弾が積載されている」

と説明すると、中に居る無線士兼装填手のⅠⅠが頭を下げる。

「椅子は、この通りハッチ側の2席しかないが」

「はい、それでいいです」

「めんどくせー…分かった。乗せなさい」

「ありがとうございます。おい、TK上等兵」

「はっ…はい」

顔面蒼白の女性が衛生兵に肩を担がれて、道端の木陰から出てきた。

『オイオイ、HG！故障車両が救急車をやるのかよ！』

「どうせ、俺らも隊長に置いてかれて補給基地に急いでいる最中だし、乗せてやろう」

『そうですよ、この人達皆女性ですし…可哀想ですよ』

とⅠⅠもHGに賛成する。

『しょーがねえな』

SKは不満げだが承知した。

「では、この席にその体調不良の彼女と衛生兵を載せましょう。この席は、車内から移動しづらいのでハッチの鍵を開けておきます。走行中に不用意に開けない様に、残りのスペースに装備品を詰めてください」

「ありがとうございます」

「後の人は、JT伍長ともう一人は運転席に、あと、3…4人いけるかな？側面のハッチから乗り込んで下さい。後の人は申し訳ないけど、車両の上に乗って下さい。そこにはシートベルトが無いので、振り落とされないよう砲か何かにしっかりつかまって下さい」

『オイ！HG！』

H Gに文句を言っているS Kに

「ここは、一応安全地帯だし、国道とはいえ、軍用車両のタコ乗りしても捕まらんだろ？それとも、この人数乗せてへたるサスペンションかよ」

『言いやがったな、アラーム電装系取り外しちまった癖に…カッコつけやがて!』

「ハハハ…悪かったね」

H G達は分隊の人達を乗せると、補給基地に向かって出発した。S Kは上に乗っている人達を落とさないように注意して運転をした。

補給基地に入り、野戦病院の前に駆逐装輪車を停車させると、分隊の人達を降ろした。体調不良の女性は他の分隊員に抱きかかえながら野戦病院に入っていた。

J T伍長はH Gに敬礼して、

「ありがとうございます」

H G達は答礼し、野戦病院に入っていくのを見届けると、

「さて、この子（駆逐装輪車）も直さんとな…」

と言って、補給基地の修理部隊の居るヤードに回送した。

整備班長に、不具合を報告して修理を依頼すると、

「S K、俺は司令部に行ってくる」

「はいよ」

輸送基地、機甲師団特殊車両試験部隊臨時作戦室…

「帝都機甲師団特殊車両試験部隊、駆逐装輪車3号車車掌H G遅れました」

「どうした？報告しろ」

指揮官の言葉にHGは直立して、

「ハッ！ 駆逐装輪車3号車は、当基地に移動中にエンジン系統、走行ギア系のアラームランプが点灯し、停車して点検した結果、エンジンルームの電装系に過電流が流れて車両監視制御機器の回路が焼けている事を発見し、応急処置を施し当基地に到着しました。現在整備部隊において部品交換中です」

「わかった、かけたまえ」

「ハッ」

指揮官は、HGが席に着くと、島全体の地図を壁に投影し、

「ここに着いたばかりだが、補給を済ませて直ぐに出撃する。偵察部隊の報告では、現在敵はこの海岸に橋頭堡を築き、軽戦車を上陸させている。現時点では75ミリ砲搭載の軽戦車3両、装甲車両8両が確認されている。この途中には火山灰の土地が散在しており、我が主力戦車では走行が困難で敵の対戦車ロケットの餌食になっている。そこで我が機甲師団特殊車両試験部隊に配属している特殊車両を以て敵軽戦車ならびに走行車両を撃破する事になった。敵軽戦車は帝都機甲師団特殊車両試験部隊所属の駆逐装輪車を以てこれに当たる。ならびに敵装甲車両は、I県領地ならびにC県領地の機甲師団特殊車両試験部隊所属の対戦車装輪部隊（HG達の駆逐装輪車とは違い、8輪装輪装甲車に75mm対戦車砲を搭載している。作者注）を以てこれに当たる。各部隊の作戦の詳細は既に部隊長に通達してある。各隊打ち合わせの上、直ちに攻撃」

「ハイ！」

HGは、駆逐装輪車部隊の隊長と作戦の打ち合わせを行った。

「1号車と2号車が敵軽戦車を追い立てるから、3号車はこの位置で待ち伏せる。3号車の修理が済み次第出発する。いいか！」

と言って、隊長はH Gに待機位置の地図を渡した。

「「はい」」

H Gは整備部隊のヤードに行くと、S Kが待ち構えていて、駆逐装輪車3号車の修理が終わったことを報告した。S Kの報告に、

「…え、リコール品？」

とH Gは驚いて聞き返した。

「整備部隊の班長が言うには、俺達の駆逐装輪車の原型である8輪装輪装甲車には、電装品に過電流が流れる欠陥があって、バッテリー周りの部品についてリコールが発生している
そうだ」

「マジか！」

「俺達の3号車は部品を交換してもらったが、1号車2号車はまだ交換してない」

「えーっ、これから直ぐに出撃だぜ」

「何だと！」

とH GとS Kが言い合っている横を駆逐装輪車の1号車と2号車が来て、1号車の砲塔から隊長が

「H G軍曹、3号車の修理状況はどうか？」

「はい、終わりました…ただ」

とH Gが言いかけると、隊長は

「なら、直ちに作戦に入る。乗車して配置場所に向かえ！」

と言って、通り過ぎて行った。

「はい…了解しました」

と走り去った1号車と2号車を敬礼して目で追いかけながら言うH GにS Kが追い打ちを

かけた。

「あーあ、どうするんだ」

「…どうしようもないな、作戦中にあっち（1号車、2号車）がエンコしない事祈るしかない…、S K、I I乗車！」

「応」「はこ」

H G達の駆逐装輪車3号車は、命令の地点に向けて出発した。

●初戦果

H G達駆逐装輪車3号車は、駆逐装輪車部隊の隊長から指示のあった地点に着いた。

『なあ、H G本当にここか？』

「そーだよな、待ち伏せなら、ここじゃなくて、後方の藪の中の窪地だよな…おい、I I本当にここか？」

H G達駆逐装輪車3号車の現在位置は、開けた火山灰地の外れ…隠れる場所は後方にある藪…この時代、位置情報衛星はまだ運用されておらず、地図だけが頼りだった…

『そう言われましても、地図ではここになっています』

とI Iが答える。

「地図が作られた当時から、火山灰地が広がったってえ事か」

『そうだろうな…』

「…下がるか…」

と言いながら、ヘルメットのつばを持って空を見上げると、後方から多数の砲声が聞こえた。

「S K、全速後退！後ろの藪に飛び込め！！」

と言って、H Gは砲塔に引っ込み、ハッチを閉めた。

『応！』

S Kは駆逐装輪車のバックギアを一気に2速に入れて後退する。駆逐装輪車は後方の藪の窪地に飛び込むと停車した。

途端に、今までH G達が居た火山灰地に砲弾が降り注いだ。

「無茶しやがって！多分味方の砲兵部隊だろう：俺達を敵戦車と間違えたか？危うく巻き添え食って死ぬところだった」

とH Gが文句を言っ

「I I、後方の砲兵隊に通信！『ここには俺達しかいない、撃つな馬鹿者！』とでも言っ
け！」

「…はい(笑)」

と言って、I Iは砲兵隊に誤射しないように連絡したが何か通信機の様子がおかしな事に気づいた。

「I I、1号車からなにか来てないか？」

「今の砲撃の爆風でアンテナが折れた模様…」

H Gの足元でI Iが叫んだ。

「なんだって！」

前方では砲弾が着弾した爆風で、火山灰地の火山灰が巻き上がり、視界を遮っていた。H Gはハッチを開けてアンテナの様子を見ることができずにいた。

『おい、H G！』

「何だ？」

『前を見ろよ』

「？」

H Gは砲塔のペリスコープを覗き込む。そこには巻き上がった火山灰の中に敵軽戦車らしきシルエットが見えた。

「1、2、3…4？4両？？確か偵察部隊の報告では、軽戦車は3両と聞いているが…」

『3両でも4両でもいいから、敵さん無傷だぜ！1号車達は何してるんだ？』

「…分らん！返り討ちにあったか、それとも電装系の故障で止まったか…さっきの砲撃は、あいつらを狙ったものかあ？」

『どーする？HG』

「うーん、しちめんどくせー、殺っちまうか！今なら火山灰が煙幕代わりになってるし」

『そうだな』

「じゃ、いくぞ！II、成形炸薬弾装填！」

「ハイ！」

「SK、ここで一発撃つから、撃ったら前進！」

『オイオイ、敵戦車隊に突入する気かよ！』

「そうだ、周りは敵だらけなら、切り込む方がいい、この火山灰で敵が同士討ちしてくれればなお良い」

『判った！』

「装填！」

IIの声に、HGは展開している敵軽戦車の左から2両目に狙いを定めて砲の引き金を引いた。強い衝撃で駆逐装輪車の前輪が一瞬浮き上がる。

HGは敵戦車に自分が撃った砲弾が当たったか確認しないで

「SK！前進！右の2両の間に割って入れ。II、次発装填！」

『応！』『はい』

SKが駆逐装輪車を前進させ、素早くHGの指示した位置につける。HGは砲を右に回転させ、IIの「装填！」の合図で、ほぼ零距离射撃で右端の軽戦車を撃つ。

SKが軽戦車の間を通過すると

「S K、反転180度、I I、次発装填！」

『応!』『はい』

駆逐装輪車は180度ターンして、砲塔を残り2両に向けた。H GはI Iの「装填!」の合図に手前の敵軽戦車を砲撃する。

この時、煙幕代わりの火山灰が晴れてきたので、H Gはスモーク弾を発射した。

しかし、スモーク弾の発射が遅れたので、残りの軽戦車の砲弾を受けてしまった。敵戦車の砲弾は、運転席とエンジンルームの間を貫通した。敵軽戦車の砲弾が徹甲弾のため、砲弾は貫通して車内で爆発しなかった。

「グア！」

S Kの叫び声が車内に響く。

「S K！」

『あつ、足をやられた…エンジンルームも破壊された。この車両はもうダメだ!脱出しろ!』

H Gは砲塔から、I Iは側面のハッチから這い出して、外に出た。H Gは運転席に回り込み、

「S K！」

「俺は足をやられて動けん!逃げろH G」

「何言ってやがる」

「そうですよ」

と言って、H GとI IがS Kの腕を引っ張る。そこに残った軽戦車が狙いを付けているのをH Gは認識した。

「(ヤバイ…やられるー)」

と思った瞬間、敵軽戦車は爆発した。

「?」

H Gが驚いていると、I Iが

「軍曹、10時の方向…」

と言ったので、H Gが見ると

「こっち！急いで！！」

藪の中から友軍の歩兵が手を振る姿が見えた。H GとI Iは足を負傷しているS Kを担いで、友軍の元に走った。

「早く、早く」

友軍の元にたどり着くと

「やっぱり…私達を乗せてくれた装輪装甲車の人達よ（駆逐装輪車を見誤っています。作者

注）」

と、歩兵の一人が言ったが、H GはS Kの事が心配で、

「負傷者が居る。衛生兵は居るか」

「はい」

衛生兵は、S Kの足の怪我を観ると、応急処置をしながら、

「至急、後方に運ばないと大変な事になります。分隊長」

「分った、すぐ引き上げよう」

と言って、歩兵達はH G達を伴って後方に引き上げた。

途中で運良く負傷者輸送のトラックを見つけ、S Kを乗せて輸送基地に運んで貰い、また

H G達も輸送基地に行く兵員輸送車に乗せて貰った。その車中で、

「H G軍曹殿、敵軽戦車3両破壊、大戦果おめでとうございます」

と女性の分隊長が笑顔でH Gを讃えた。

「君は…確かJ T伍長…」

「覚えていてくれましたか」

と言って、J Tは微笑んだ。

「残りの1両は？」

「自分達の対戦車ロケットで仕留めました。軍曹殿の戦果報告は自分が証人になりますので、自分達の戦果報告の証人をよろしくお願いいたします」

「分かった」

S Kは輸送基地で緊急手術を受けた結果、足を切り落とさずに済んだが、左脛の腓腹筋の大部分が失われたので、杖を使わないと歩けない状態になった。

H GとI Iが補給基地に到着し、機甲師団特殊車両試験部隊臨時作戦室で戦果を報告すると、指揮官が

「H G軍曹、よくやってくれた。敵軽戦車が偵察部隊の報告から増えた事は想定外だった。

また駆逐装輪車部隊の1号車と2号車は、敵軽戦車を君達の待ち伏せ箇所に向かわせた直後エンジンルームからの発煙により、動けなくなった。1号車と2号車は敵歩兵の対戦車ロケット攻撃を受け、隊長は重症、他の隊員は敵歩兵の銃撃により戦死者3名重軽傷者2名を出し、味方歩兵に救出された。また敵装甲車両8両は、君達が敵軽戦車を引き受けてくれたおかげで、I 県領地ならびにC 県領地の機甲師団特殊車両試験部隊所属の対戦車装輪部隊によって駆逐された。帝都機甲師団特殊車両試験部隊は壊滅的損害を受けたが、目的は達成された。なので、帝都機甲師団特殊車両試験部隊は負傷者と共に後方に移送する」

「ハッ！」

H Gはその足で野戦病院に向かった。そこに居たJ T伍長にお礼を言うと共に自分達は後方に移送される旨を伝えた。

「そうですか、短い間でしたが軍曹殿の働きお見事でした」

「ありがとう…ところで、こっちに来る途中乗せた体調の悪い人は？」

「T K上等兵の事ですね…彼女は、ここで緊急手術の上、回復後後方に送られることになりました…そのまま除隊する事になります」

「え？」

「理由は聞かないでください…」

とJ T伍長は暗く沈んだ口調で言うので、H Gは

「…分かりました」

とだけ答えた。

帝都に向かう輸送艦の中で、H GとI Iは駆逐装輪車部隊隊長に労いの言葉を受けた。

「H G軍曹、君達の3号車の奮戦。我が隊の誇りだ。3号車だけが無事に任務を遂行できたのは奇跡的だ」

「隊長…3号車は、補給基地において、ベースとなった8輪装輪装甲車の電装品に過電流が流れる欠陥があり、バッテリー周りの部品についてリコールが発生している部品を交換して貰いました。あの部品は我が隊では受領してからいじっていない部品です。隊長達が悪いわけではありません。たまたま運よく自分達の3号車が作戦前に部品が壊れ、交換できただけです」

「…そうだったのか…でも、部下を失ったのは自分の責任だ。でもよくやってくれたH G軍曹、I I上等兵」

「…」

H GとI IはS Kが居る船室に入った。

「S K、調子はどうだい？」

「おう、H G。俺はもうダメだね…この足では。このまま帝都の部隊に却って傷痍兵として

除隊する事になるだろう…」

「…そうだな」

「H G、先に除隊してガンスミスをやってるから、お前も除隊したら連絡をくれ、一緒にガンスミスをやろうぜ」

「…そうだな」

S Kは部隊に戻ると、傷痍軍人として軍曹に進級し除隊になった。

●その後…

S Kが除隊後、その後任としてY T二等兵がH Gの配下に就いた。

その頃、世界の兵器事情は、今までの半機械制御から本格的にコンピューターとソフトウェアを使った制御に移行し、H G達は特殊車両の評価ならびに実戦での評価の他にソフトウェア制御の兵装機器やミサイルなどの誘導兵器の評価ならびに実戦での評価任務が追加され、H G達もソフトウェアのプログラミングを学ぶ必要が生じた。

部隊内では、ソフトウェア制御の機材・兵器類の制御ソフトウェア自体の大きな改造が出来ない（部隊内では動作条件パラメータの変更程度が関の山）ので、H G達は民間の兵器金業の事業場に出向してそこで企業の技術者に混じって作業を行い、そのテストは部隊の演習場で行うと言ったパターンになった。

一方、世界情勢はC国の反乱政府は勝利宣言を他国に宣言し、国として認めるよう国連に詰め寄る。背後にはN国政府が強く関与していた。国連は仕方なくC国の反乱政府を新政府として承認した。すると、N国政府はC国内でN国兵が駐屯している領土をN国に割譲するよう強要してきた。C国の新政府は国連を動かして抗議したが、他国が「勝手にしろ！」とばかりに助けを出すことがなかった。唯一、海を隔てた皇国だけが隣国のC国に対して皇国

に逃れてきた旧政府の人達を受け入れる事を条件として、支援を提案した。

C国全体が戦場になった “先の大戦” と呼ばれる戦争が再度始まった。

C国新政府は「折角追い出したものを…」と歯噛みしつつ、支援を受け入れた。皇国が再度派兵を行うと、今まで日和見を決めていたC国周辺国が一斉に派兵・支援を始めた。これにより、N国の兵力は自国領付近まで後退する事を余儀なくされた。またC国に帰還した旧政府の人達は自ら先頭に立って戦ったので、C国国民に大きな支持を得た。

この頃のHG達は実戦では車両はもとより、地上戦での初期の無人車両や装備機器の評価の任務が追加され、HG達は皇国政府軍の兵士達に混じってC国内や皇国防衛で戦闘に参加する機会が増えた。

この時期、HGは曹長に進級し、膠着するC国戦線でN国兵士の一斉突撃による塹壕の中で、初めて生身の人間相手に肉弾戦を行い、敵国兵を殺した。

その後、度々の戦闘でHGは下士官の最上級である上級曹長にまで昇りつめた。この先は士官学校に行かないと尉官に進級できない。士官学校に進むには、学術と戦績と部隊司令官の推薦が必要になる。HGは士官学校予備講座を修了し、戦績も上げているが、HGは運が悪い事に、C国内の前線や皇国内の防衛戦線と民間兵器産業の工場との往復で、所属部隊に戻る事が無く、民間兵器産業に長期出向状態になっており、部隊司令官の推薦状を貰えなかった。

●軍縮によるリストラ

長い間、C国は内乱と、N国との戦闘、隣国との小競り合い状態が続いていたが、C国の新政府下で行われた選挙では旧政府の人達の候補者が多く当選し、C国政権議会の与党に

なり、政権を取り戻した。そのこともあり、C国新政権と皇国は友好条約を結び、国連配下の軍縮条約に基づき、今まで膨大な国家予算をつぎ込んで維持し続けてきた皇国政府軍（後に正規軍と改正）の軍縮を行った。そのために、皇国ではそれまでの徴兵制度の廃止が決定された。

徴兵制度では4～6年の兵役に就く法律があるが、“先の大戦”下の戦争で人的損耗が激しく、皇国では戦闘が出来る兵士の人員を確保する必要があり、徴兵制度の法律が改訂され、徴兵期間終了後は、本人の意思表示により、任期継続または除隊が可能になった…但し、当時の兵士の給料は大手企業並み…また60代からの公的年金支払額の上乗せや戦死した場合の遺族年金等の優遇措置が、兵役が長ければ長い程有利になる…当然継続する者が多かった。

HGの場合はそれとは違い、民間兵器産業に長期出向状態のため、本人の希望に関係なく軍籍に留まり続けた。

軍縮が始まり、陸海空の三軍の軍縮により、HGが所属していた帝都機甲師団特殊車両試験部隊が整理され、HGはリストラに合う事になった。

HGの部下のIIとYTは、HGと異なり新設された兵器開発局に異動になり、軍籍に留まる事が出来た。

●エピソード

HGとSKはY市の商工会議所が主催するエージェント派遣会社と関連企業の交流会に出席した。

「なんか、成果が無い交流会だったな…ウチの客に芸能事務所〇×エージェンシーが居ると知ると、途端に名刺交換を求めて来やがって…こちらがガンスミスの仕事はないかと言うと、素知らぬ顔をしやる」

とS KがH Gに愚痴を言った。

「そうだな…同業者はウチもそうだが皆小さな会社だ。客を増やして大儲けを狙っているんだよ」

「挙句には、『特別銃器携帯・使用許可証』取得コース研修所と名乗る輩まで来やがって、俺達が『限定解除』を持っていて、『ウチのエージェントは、一人を除いて皆『限定解除』持つてるぞ!』と言ったら、そそくさと逃げていきやがった」

「そーいや、I Aはようやく『特別銃器携帯・使用許可証』を取得したなあ…他の娘共は『限定解除』になったが…」

「1度目は、的を外すわ、部品を無くすわ、2度目は時間切れ…、3度目によりやく合格…」

「お前、2度目落ちた時に、『右目（I Aは右利きですが、利目が左です。作者注）潰すぞ!』って言うって泣かしたそうじゃないか!娘を虐めんなよ」

「プレッシャーと言って貰いたいね…誰が本気で潰すかよ」

とS Kは笑いながら言い、続けて

「それにしても、しょーがない交流会だった」

「俺は、あつたぞ」

「なんだ？」

「お前が除隊した後に俺の下に配属されたY Tと民兵会社で俺が教えたY O…こいつら今、P C教室やキッキング請負とかホスティングサービスをやっている…これからますますコンピューターの世界だ…サイバーセキュリティとかも考えないと」

「そーか」

Y市の商工会議所のビルから駅に向かってH GとS Kが歩いて行くと、駅前再開発の土地にある雑居ビルにB a rの看板を見つけた。

「おい、H G。このB a rで少し飲んでいかねえか？」

「そうだな…このビルも再開発で取り壊しか」

と雑居ビルの入り口に『駅前再開発について』と書かれてある地図入りの張り紙を見てH Gが言った。

「こーいう所に、腕のいいバーテンが居るんだよねー」

「ウチに来て、夜のP u b営業してくれないかね」

白山亭の夜P u b営業はH Gが行っていたが、エージェント業務で度々休業する事があり、休業の度にI Fから文句を言われていた過去から、そろそろ夜のP u b営業を任せられるバーテンを探していた。

「話をしたら？」

「そうだな」

H G達は、雑居ビルのB a rに入った」

「いらっしやいませ」

とバーテンが言うと、H GとS Kは一瞬目を疑った。

「お前、I Iじゃないか」

とH Gが言うと、バーテンもH GとS Kを見て、

「H G曹長とS K軍曹…お久しぶりです」

と言って、応じる。

「いや、久しぶりだな」

「はい、ここで会えるとは…」

「お前、ここでバーテンやつてるんだ」

「はい、でも、もうじき駅前の再開発でこのビルが取り壊されるので追い出されますが…」

「この店無くなったらどうするんだ？」

「…実は、次が決まって無くて…」

とI Iが口を濁すと、S KはH Gを突いて

「おい、H Gこれは…」

「そうだな」

{?}

「実は、俺はY国際港で昼は喫茶店、夜はP u bの店をやってるんだ。P u bは俺がやってるんだが、任せる人を探して居るんだ。お前来ないか？」

「はあ…場所と立地次第ですが…」

「Y国際港駅前の白山亭って店なんだが」

「白山亭ですか？最近営業再開した老舗じゃないですか！」

「老舗かどうかは…俺が婆さんの店の白山亭を再建した」

「そうですか、白山亭ならば家に近いですし、申し分ありません。逆に私から雇って欲しいです」

「…そう言う事で、ウチに来たよな」

「髭まで生やして…H Gを真似たか？I ちゃん」

「…やめてください。先輩方」

夜の白山亭のP u b営業で、店内のバーカウンター越しにH GとS KがバーテンのI Iと語り合っていた。

「巻き込まれ親父の番外編」その内親父と呼ばれる男」 Ⅱ完Ⅱ」